

19世紀のロシアで編纂されたロシア民謡集について

Collection of Russian Folk Songs Compiled During the 19th Century in Russia

安原雅之 Masayuki Yasuhara 愛知県立芸術大学音楽学部教授 (音楽学)

Abstract

Numerous collections of Russian folk songs have been published in Russian from the end of the 18th century through the 19th century. Some of these collections, including the Lvov-Prach collection, are known; however, most of them are almost entirely forgotten.

Due to their utilitarian features, they lack significance as folk heritage and cannot be considered as a song that can be sung using a piano.

There are three old collections: *Sobraniye raznikh pesen* by M.Chulkov (4 vols. 1770-1774); *Sobraniye russkikh pesen s notami* by V. F. Tolstovsky (4 vols. 1776-1795); and *Sobraniye russkikh narodnikh pesen s ikh golosom* by N. A. Lvov and I. Prach (1790; rev. 1806, 1815, 1896).

This paper synthesizes the components of the collections as a whole. In addition, it reevaluates how they contributed to formulate Russian music in the second half of the 19th century. Several tunes from the collections were borrowed in the composition by various composers, including L. v. Beethoven in his Razmovsky String quartett, op. 59, among others.

19世紀のロシアで編纂された民謡集について

19世紀のロシアにおいて出版された“民謡集”については、リヴォフ Nikolay Aleksandrovich Lvov (1751-1804) とプラーチ Ivan Prach (1750-1818) によって編纂された民謡集など、いくつかの存在は知られているが、それらが研究対象となることはほとんどない。多くの民謡集については、その存在すら知られていないと言っても過言ではない。

そのような状況の背景に、民謡集の特質が大きく関与している。というのは、ほとんどの民謡集で、民謡は西洋音楽の理論に裏付けられたピアノ伴奏付きの楽譜として記譜されており、かならずしも民謡本来のかたちを提示しているとは言えない。そして、そのような理由から、音楽民族学的な民謡の研究にとっては、重要視されない。また、ピアノ伴奏がついていても、実際にそれを声楽曲として歌ったり、あるいは鑑賞するに相応しいものでもない。その結果、当然ながら、伴奏を伴った民謡集は軽視されてきた。

19世紀のロシアでは、作曲家が自ら民謡の採譜／収集を行わない限り、作曲家たちは、当時ロシアで出版されていた数々の「ロシア民謡集」に収録された楽譜から民謡を知ったと考える方が妥当であろう。バラキレフは自ら収集していたが、リムスキー＝コルサコフ Nikolai

Andreevich Rimsky-Korsakov (1844-1908) やチャイコフスキー Pyotr Il'yich Tchaikovsky (1840-1893) などのように、自ら現地に赴いて民謡を収集したわけではないが、民謡集を編纂して出版している場合もある。いずれの場合も、採集された民謡は、西洋音楽の理論に裏付けられた記譜法にそって採譜・記譜され、多くの場合ピアノ伴奏が付されることによって、民謡はそれぞれ本来持っていた特質を失い、かつ、変容しつつ傳承される民謡としての伝統は終わることになる。しかし、記譜されることで、民謡は消滅することなく、記譜された音楽として残ることになったのである。

最も古いロシア民謡集として、次の3つのコレクションを挙げるができる。

まず、ミハイル・チュルコフによる民謡集 (*Sobraniye raznikh pesen* [さまざまな歌のコレクション] . 4 vols. 1770-1774.)。これは、印刷された民謡集としては、最も古いものである。楽譜は含まれておらず、歌詞のみが掲載されている。ミハイル D. チュルコフについては、詳細不詳。タイトルの「さまざまな」が示唆するように、民謡以外のものも含まれるが、1770年に出版された第1巻では、約200曲のうち、第121番以降が民謡の歌詞となっている。同じく1770年に出版された第2巻以降も、同じような内容である。第3巻は1773年、第4巻は1774年に出版された。

次に、V. F. トルトフスキー (ca. 1740-ca. 1810) による民謡集が挙げられる。(*Sobraniye russkikh pesen s notami* [楽譜付きロシア民謡集] . 4 vols. 1776-1795.) これは、楽譜を含む民謡集として最も古いものである。それぞれ20曲を含む4巻からなり、1776年、1778年、1779年、1795年に出版された。楽譜は、単旋律の歌のパートともうひとつの単旋律で構成されているが、後者は恐らくグースリを想定したものであると考えられる。この民謡集に含まれる曲のいくつかは、V. A. パシュケーヴィチ (1742-1797)、A. N. セローフ (1821-1871)、M. P. ムソルグスキー (1839-1881) らのオペラなどに引用された。

そして、リヴォフとプラーチによる民謡集 (*Sobraniye russkikh narodnikh pesen s ikh golosom* [旋律つきロシア民謡集] . 1790.) が、一連のロシア民謡集のなかでも最も良く知られているもので、歴史的にも最も重要なものと言えよう。

ロシアの音楽事典によれば、リヴォフは文化的な活動家で、かつ考古学と地質学の研究者、建築家、芸術家、詩人、音楽家、民謡収集家であり、ロシア科学アカデミー (1783-) とサンクトペテルブルク芸術アカデミー (1786-) の会員であった。また、アメリカの音楽学者タラスキンによれば、地主でもあったリヴォフは、芸術的および科学的興味や、あるいは娯楽のために、海外も含めて旅行で各地をまわった。また、当時のロシアにおける著名な芸術的サロンの常連メンバーでもあった。

プラーチは、チェコ出身の作曲家、教師、民謡収集家であり、人生の大半をロシアで過ごした。リヴォフとプラーチは、共同でロシア民謡集を編纂した。初版は100曲の民謡を含むもので、1790年にサンクトペテルブルグで出版された。ロシアの田舎と都市の両方で採集された民謡を含み、楽譜は、歌詞付きの民謡の旋律に鍵盤楽器様の伴奏が付されたものとなっている。ま

た、1曲ごとに歌詞が併記されている。この「100のロシア民謡による画期的な大要 (Taruskin 1997: 16)」は、その後内容も増え、版を重ねることとなった。1806年に出版された第2版では、初版の100曲のうちの97曲に、新たに53曲が加えられ、計150曲が収録された。そして、第3版が1815年に、また、新しいイントロダクションが含まれた第4版が1896年に出版された。20世紀になっても、第5版がモスクワで出版されたほか、1987年には、1806年版のファクシミリ版が、英語による解説付きでアメリカで出版されたことによって、この民謡集が容易に入手できるものとなった。

ロシアの音楽学者フィンデイゼンは、上記の3つの民謡集に含まれる曲のリストを比較することによって、これらの相互関係を明らかにしている。その一覧表から、トルトフスキーの民謡集に含まれる計80曲のうち、19曲はチュルコフによるテキストを使っており、また、リヴォフの民謡集は、それら19曲のうちの15曲を含み、さらに別の18曲が別のチュルコフによるテキストを使っていること、つまり、リヴォフの民謡集に含まれる100曲のうち33曲のテキストは、チュルコフの民謡集から採用されていることがわかる (Findeizen 2008: 238-241)。

ルードヴィヒ・ファン・ベートーヴェン (1770-1827) は、彼のパトロンの一りであったラズモフスキー伯爵 (1752-1838) から委嘱され、3つの弦楽四重奏曲を作曲している。それらは、作品59として出版された。ラズモフスキーは、サンクトペテルブルグ生まれのロシア人で、外交官であった。1792年から99年まで、また1801年から1806年まで、ウィーンにおけるロシア大使をつとめた人物であるが、芸術のパトロンとして広くヨーロッパで知られていた。作品59の弦楽四重奏曲では、ロシアに敬意を表して、ロシア民謡「いと高きところには栄光、神にあれ Glory to God in the highest」の旋律が使われているが、ベートーヴェンは、それをリヴォフとプラーチによる民謡集から引用した。この民謡は、ベートーヴェンの作品59-2を含む、異なる作曲家による少なくとも9つの作品で使われている。また、その他の代表的なものとしては、ムソルグスキーの《ボリス・ゴドゥノフ》や、ラフマニノフによるピアノ連弾曲などが挙げられる。

また、ベートーヴェンは、この民謡集に収められている民謡のうち、これ以外でも、作品59-1の第4楽章で使われたものをはじめ、5曲を自作で使っている。

このように、ロシア民謡集に含まれる民謡が、さまざまな作曲家による、さまざまな作品に、主題として使われている。現在、18世紀末から19世紀にかけてロシアで出版された「ロシア民謡集」を調査しているが、それらに含まれる曲はかなり重複している。ロシアにおける“芸術音楽”の研究においても、“民族音楽”の研究においても見過ごされてきた「民謡集」だが、本来は口頭で伝承され、歴史のなかで次第に変化していくものであったであろう民謡が、西洋式の記譜法によって記譜され、さらに、西洋音楽風の方法で伴奏が付された歌曲として書き留められた“民謡”となり定着することとなった。そのような、「メタ民謡」とも言える民謡を通して、人々はロシア音楽の象徴性を認識することができるようになったと言えるのではないだろうか。

参考文献

- Findeizen, Nikolai. 2008. *History of Music In Russia From Antiquity To 1800, Volume 2*. Translated And Annotated By Miloš Velimirovic And Claudia R. Jansen. Bloomington: Indiana University Press.
- Gippius, E. V. 1978. “Прач (Прач) Иван (Ян Богумир).” *Muzykal'naya Entsiklopediia* – 4. Moscow: Izdatel'stvo sovetskaia entsiklopediia.
- Kann-Novikova, E. I. 1976. “Львов Никокай Александрович.” *Muzykal'naya Entsiklopediia* – 3. Moscow: Izdatel'stvo Sovetskaia Entsiklopediia.
- Taruskin, Richard. 1997. *Difining Russia Musically: Historical And Hermoneutical Essays*. Princeton: Princeton University Press.